



駿府と今川氏

第20回

「人質」時代の松平竹千代と駿府

好待遇を受けていた竹千代

松平竹千代、すなわち後の徳川家康は、天文十八年（一五四九）の暮れから永祿三年（一五六〇）までの足掛け二年間、年齢でいうと八歳から十九歳まで、今川義元の「人質」となって駿府に抑留されていた。

通説では、この「人質」時代の辛酸が後の大成の基礎になったとされている。しかし、人質は人質でも、竹千代の場合は普通の人質と違ってかなり優遇された人質だったのである。そのため、あえて「人質」というようにカッコを付けることにしている。

その理由を整理すると、三つになる。一つは、元服のとき、今川義元から「元」の一字を与えられ、はじめ元信、次いで元康と名乗った点である。殿様の名乗りの一字をもらえるのは重臣の証明であった。

第二に、義元の妹の娘、すなわち姪と結婚していることである。これは一門待遇といってよい。そして第三に、義元の軍師とも執権とも言われる太原崇孚、すなわち雪斎に学問を教わったという点である。

意外と自由奔放だった少年時代

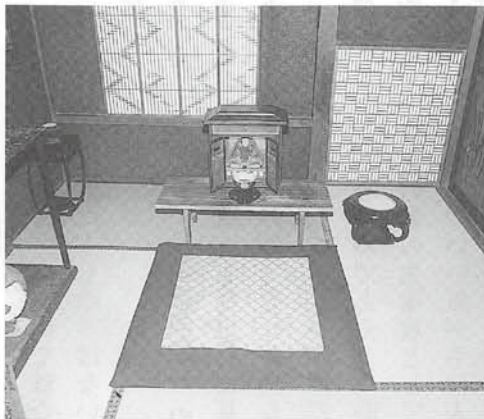
竹千代の「人質」屋敷の場所については、史料によって「少将宮の町」とか「宮の前」などと書かれているが、これは、少将井社と言われた小梳神社の前にひらけた町といった意味である。

小梳神社は、現在は葵区紺屋町、ちょうど旧西武百貨店静岡店の前に鎮座するが、かつては、現在の青葉小学校のあたりだったという。したがって『静岡市史』旧版は、北街道を挟んで南側の現在の葵区鷹匠一丁目あたりに推定しており、その可能性はあると思われる。

竹千代の母於大の方の母、すなわち竹千代にとって祖母にあたる源応尼（於富の方）が駿府におり、この源応尼が小さい頃の竹千代の面倒をみたと言われている。源応尼のいたところが現在の華陽院である。

『御当家紀年録』という史料によると、竹千代が十歳のとき、今川館で正月元旦の拝賀の儀が行われた際、いつ義元がお出ましになるかわからない状況にもかかわらず、縁先から立小便をして、周りの今

川氏重臣たちを驚かせたという。また、少年時代から鷹狩りに興じていて、あるとき、義元の父氏親の菩提寺である慈悲尾の増善寺に墓参りに出掛けたとき、山裾の寺で小鳥がたくさんいるのを見て「ここで鷹狩りをやりたい」と言い出し、等膳和尚の一喝によってあきらめたというエピソードも伝えられている。結構腕白だったのであろう。



▲臨濟寺に復元されている竹千代手習いの間



撮影：水野 茂